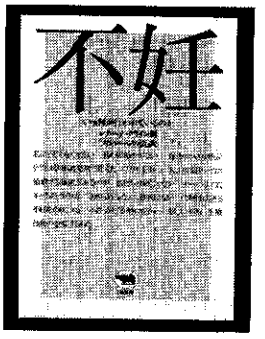
〈書　　評〉



不妊—いま何が行われているのか—
レナーテ・クライン編　「フィンレージの会」訳
A 5 版　465頁　晶文社　1991年

不妊とは望んでいるのに子供ができない状態のことで，不妊の夫婦は全夫婦の約1割といわれている．このうち妊娠を希望して医療機関の不妊外来を訪れた夫婦に対しては，以前から排卵誘発剤の投与や人工授精などの「不妊治療」が行われてきたが，1978年に世界初の体外受精児がイギリスで誕生して以来，生殖医療のめざましい進展がマスコミでも大きく取り上げられるようになった．しかし生殖医療の実態，たとえば肉体や時間，金銭などの面でどれだけ負担がかかるのかといったことや，副作用や合併症のこと，何よりも肝心な当事者の女性がどんな気持でいるのかといったことは，これまで一般に知られることも関心をもたれることもほとんどなかったといってよい．

本書はオーストラリア，ドイツ，アメリカ，イスラエルなどでこのような生殖医療を体験した女性たちの体験談をまとめたものであり，これまで死角となっていた領域に光を当てたというだけでも類書を見ない，まことにユニークな価値ある一冊といえる．

内容は5部構成になっている．第1部は伝統的な不妊治療を受けた女性たちの体験記であるが，ここですでに苦痛や屈辱，医者への不信が渦巻いている．第2部は体外受精の体験談で，「何もかもが人工的で疎外的であった」ことなどが語られる．第3部「代理母」には子供の引渡しを拒否した「ベビーM裁判」で有名になったホワイトヘッドさんや，1980年にアメリカで最初に合法的な代理母となってマスコミに派手に登場し，後に代理母に反対する運動に身を投じた「エリザベス・ケイン」（終始この仮名で通している）の手記が含まれており大変興味深い．

さらに第4部「不妊をのりこえる」では，女性に対して母になれという社会的圧力（出産至上主義）に新しい生殖技術の導入が加わって，「あきらめる」という選択がいっそう困難になっている状況が述べられる．これは生体からの臓器移植という新しい技術の導入が近親者に臓器提供を求める圧力を増した状況に通じるものがあるといえよう．すなわち，体外受精などの新しい技術を受けないうちは，「この可能性を試さないようでは，本気で赤ん坊を欲しいとは思っていないんですね」と言われかねないわけで，不妊女性にとって新たな重荷が加わったというのが編者らの認識である．そしてこの状況に対して，生殖医療に頼らずに，不妊をどう建設的にとらえていくか，女性たちが提案を出す．

最後に第5部「生殖技術の意味するもの」では，生殖技術の開発が医者や研究者の名誉欲やビジネスの標的になっているばかりか，必然的に遺伝工学と結びつき，優生思想に根ざした恐るべき非人間的世界へと導く危険性を指摘する．

編者のレナーテ・クラインは生物学と女性学を専攻し，現在オーストラリアでフェミニズムの立場から新しい生殖技術と遺伝子工学に関する調査を続けている人で，フェミニストグループ「フィンレージ」（生殖・遺伝工学に抵抗するフェミニストの国際ネットワーク）の創立メンバーであるという．また翻訳にあたった「フィンレージの会」とは，生殖医療について考えることをテーマに集まった，教員，看護婦など様々な仕事をもつ女性のグループで，この共同翻訳が初仕事という．

生殖に関する研究は従来ともすれば医療技術など自然科学の面にのみ関心が向けられがちであったが，今後わが国でも心理や社会，倫理といった観点からの研究が盛んになることを期待したい．

佐藤龍三郎（保健人口学部）